学会主催の思い出

第20回　会長　橋　本　義　雄

日本胸部外科学会も昭和52年をもつて，第30回を迎えることになり，この度，その記念委員会の早田義博委員長より，曽て会長を務めた者に対して学会主催の思い出を綴ることの依頼を受けた．

私が本学会の会長の任を受けたのは昭和42年10月４日（水），５日（木）の２日間にわたり名古屋市の愛知文化講堂，中電ホール，中区役所ホールの３会場で開催された第20回日本胸部外科学会総会であった．それは今から10年前のことである．私は翌年の３月末日には名古屋大学を停年退職した．その時会長挨拶として「本学会もいよいよ成人に当る歳月を迎えることになり，大いに祝福すべきである」と述べたことが思い出される．当時の会員数は4312名で，現在数と比較すると創立以来20回にわたっての会員の増加は可成り高率であったことが推測される．

ところで学会長として一番大切なことは，プログラムを中心とした演題の選定，日程の編成であると思う．ご承知の如く昭和42年はその春第17回日本医学会総会が名古屋市で開催された年であった．それより先，昭和38年４月５日の大阪で開かれた第16回総会の閉会式において次期総会の会頭として勝沼精蔵先生が選ばれ開催他は名古屋市と決定した．その後私は会頭から準備委員長の大役を指名依嘱された．会頭は卒先していろいろな構想を私どもの前に披瀝された．それは近年医学の急速な進歩にともない細別化され，深められてゆく各領域を，ここに大きな立場で見つめ，今後の医学全体の方向づけを見出すために学会開催にあたり，従来のシンボル・マークの外に日本医学会総会としては始めての標語が提唱された．それは「分化と総合」という句である．ここに突然思わざる悲劇が勃発した．勝沼会頭が本総会を引き受けられてから未だ半年有余過ぎたばかりの昭和38年11月９日，会頭はある記念講演の壇上で突然倒れられた．早速駆けつけた私は途端に総会開催のことが一瞬脳裏をかすめた．翌10日会頭はあらゆる医療と多くの人々の恢癒への祈願も空しく，その夕刻病状急変し，ついに不帰の客となられた．会頭を失つた後は一時は名古屋での総会開催が危ぶまれ，私もその成り行きを憂慮したが，会頭が生前に総会開催の構想を既に確立しておられていたために，その由早速日本医学会評議員会に諮り，詳しく経過を報告し，突然の悲劇，しかし一致協力，一貫して勝沼構想は押し通され，既定の通り名古屋で開催されることに決定した．そして終始勝沼会頭の名をはずすことなく，昭和42年春の総会開会式，閉会式には会頭の椅子に遺影を安置し，会頭の生前唱えられた構想に従って総会は完遂された．そしてそれに付随した55の各分科会もその年の春と秋に二分され，それぞれ遂行された．今ここに当時の各学会を回顧すると，その黎明から落陽にかけて展開されたさまざまな追憶が浮び出され感無量である．

このような関係で分科会としての第67回日本外科学会並に第20回日本胸部外科学会の会長の順番が私の身に回ってきた．私にとっては身に余る光栄であった．

斯くして私は片方では総会準備委員長として，他方では二つの分科会長として，またこの準備期間中に偶々医学部長の要職を併任し，さらに日本学術会議会員に選出されるなど私にとっては日本胸部外科学会の学会主催の思い出と連想し，その前後を通じ万感胸に迫ることを覚える．

これは後で耳にしたことであるが，このように一人多役を担った者はないとのことで，実際努めてみると医局員への負担が多くなり，その鋭意専念の精励に対しては当時を思い出す度に感謝の念

に堪えない，その頃は学会のあり方についてもいろいろ論議され，医学関係者は医学教育，研究，診療を巡る諸問題に直面し，それは近代医学の進歩は益々その速度を増し，学会そのものも更に分化しつつあることから，年と共にその数が多くなり，それら諸学会にも出席せざるを得ないという甚だ困難な事態に立ち入ってきたことが唱道されるに至ったのである．

春の外科学会では総会の標語「分化と総合」の意を含み，外科関連領域は外科学会が卒先して総合誘導すべきであると考え，演題は各施設で1題ずつとして格調高い得意なものを選び，外科系関連領域の問題については終日を通して一会場を当てそれぞれの専門家に教育講演として依頼した．ところで秋の胸部外科学会では何といっても分化された専門的色彩が主体となるので演題申込みも各講座，施設から2題以内として，その内訳は心臓に関するもの80題，肺臓に関するもの60題，食道に関するもの20題，その他15題となった．シンポジウムとして肺結核，開心術の2課題が取り上げられた．

また第20回本学会の評議員会で取り上げられた議案として特に思い出されるものは，日本胸部外科学会認定医認定制度規則（案）の提出で，当時は他学会でも専門医制度の問題が喧しく，他学会の意見なども参考として検討されたが本学会では当時は未だ採決には至らなかった．なお一つ思い出される重要議案としては日本胸部外科学会規則（案）の提出で，その内特に注目された条文は役員の項で本会に7名以上10名以内の理事，2名または3名の監事をおくことが審議され，これは採決された．斯くして第20回総会において本学会の理事制が発足したことは特筆すべき思い出の一つである．

以上思い付くままに10年前の本学会会長としての思い出の一端を述べてみたが，その後の本学会の発展の姿を眼の辺り見るにつれ専門分科会としての会員諸氏の一層の研鑽を期待するとともに，「分化と総合」の精神のもとに一般医師に対してもその粋が修得される機会が得られることを念願して筆を擱くことにする．

（名古屋大学名誉教授）